

に陶然となつたのは聴衆の一人、私のみでは無かつたらう。

大石君の姑娘は支那最負の日本人が、ひと目で、ぞつこんと云ふところ、黙つて居るとレターの二、三十通はたしかに舞ひ込んで来る器量好し、それでハーモニカの獨奏を演じたのだから堪らない愛嬌たつぶりの奏し方が「氣に入つた」と叫んだ者があつた。竹内君の暮の油賣は育ちが知れ相な隠し藝、白澤に向ふ鉢巻、廣告旗押し立て、おもむろにトランクから取出した片足のもげた禿頭の人形では無い、慕々そこで慕賣口上、高々と張り上げて「サーテ お立合ひ……」とやらかした。後で聞くと口を開けてボカーンと見上げて居た暖いのが随分居た相な——。成川君のヒットラーが力強いドイツ語で「マイクの前に立ち擧手の禮も嚴肅に祝述を述べ、次いで滔々と放つた、獅子吼は、さしも廣大な身中グランドを埋める觀衆を壓倒し盡して終ふ。ところが此の時のドイツ語がイロハの逆だつた事は、さすがヒ（知）ットラーも知るまい。續いて堂々踏步し來つた渡邊君のムツソリニーもアイウエオの逆しまを祝辭に代へ、早變りした竹内君の近衛、細井君の鄭孝胥、村田君の汪精衛、五ヶ國代表のぐつとひきしめた歴史的握手は二千六百年奉祝歌のバンドの吹奏裡に、或は高く或は低く個々の意志と意志とをその瞳に輝やかせて、離れず暫しは應激の坩堝に没入して居た。かくて終始一時間半に亘るハーモニカ行進は幕となつたのであるが此の大成功の裏面に隨分苦心のあつた事をも、止めて置き度い。勿論各役員が一致團結して努力した事が此の結果を齎ら

したのであるが、特に村田君の指揮宜ろしきを得た事をあげて感謝し、同時に舞台裏にあつて種々の配慮をねがつた酒井君、杉山君に感謝する次第である。

新体制と同時に産聲をあげた音楽部だけに、確固たる基礎は今のところ出来て居ないが、次の様な事を考へてゐる。

- 一、先づ音楽部そのもの、向上の意味から謂つて、名曲レコード鑑賞を、ぜひしたいと思つてゐるが、その設備が現在皆無である故此れを整備する事、音楽室の設置等。
- 一、雅樂研究方法の具体案と實施

## 校友會々報

今年は何んといふ芽出度い年であらう。大日本國は紀元二千六百年、祖山學院は創立第三十周年、何れも未曾有の奉祝年である。幸ひなる哉、内に新体制の胎動をき、外に世界新秩序の建設をみる。靜かに母校の歴史をたどれば、御草庵に於ける宗祖九ヶ年の御垂教は身延川の清き流れの如く、今尙祖山學院に流れ傳へられてゐる。

弘仁二年（祖滅二五五年）延山第十七世善學院日鏡上人は西谷善學院を開創した。かくて四十四年つゞいた善學院は慶長九年十二月延山第二十二世心性院日遠上人によつて更に擴張され西谷檀林と稱した。それから二七一年間つゞいた西谷檀林は明

治七年十一月二十二日延山七十三世日薩上人によつて身延檀林と改稱され、爾來の能化職を廢し、法首直講の制を定めた。現在の本師堂はその時の講堂である。明治八年六月日蓮宗大會の決議によつて身延檀林を日蓮宗中學院と稱し、更に明治十七年延山第七十四世日鑑上人は中學院を日蓮宗大檀支林と改めた。

明治二十三年延山第七十五世、日修上人は大檀支林を甲府へ移轉し宗義専門學校（宗學林）といつた。明治二十八年六月延山第七十七世日嚴上人は宗學林を小檀林と改め、明治三十五年延山第七十八世日良上人は小檀林を小學林と稱した。

明治二十六年一月十七日延山第七十六世日阜上人は祖山大學院を創設し、自ら教頭として親講し、明治三十六年四月日良上人は本科三年豫科五年制度をしき、明治三十八年三月名を祖山學院と改め、明治四十一年五月十一日豫科五年を三年制とした。明治四十五年四月延山第七十九世日慈上人は祖山學院に小學林を合併し、高等部四年（二年後三年制に改む）中等部五年制を定めた。

昭和十二年四月中等部を中學林とし、昭和十五年中學林を祖山中學と改め、昭和十六年二月十二日付文部省の認定を得た。上教學に御理解ある院長親下をいたゞき、下順良なる能所を擁し、昨今學院は内容外觀共に完備し、本化教化の道場として將來益々發展するであらう。

こゝに謹んで紀元二千六百年と學院創立三十周年を祝禱し奉る。

尙全國校友諸兄より御通信を頂くことがあまり少かつた爲校友會名簿は同窓會と合体して出版した。（武田生）

## 北陸校友會支部會報

事務所 富山市梅澤町二一七立像寺内

### ◆記 事

一、四月中旬より下旬に渡り祖山法主親下北陸の御巡錫あり、同月二十日支部代表七名金澤市立像寺に於て御氣謙奉伺し當支部の目的、人員、現況を申上げたる所、過分の賞詞及激勵の辭並に金一封を賜る、一同感激を新にして本支部の發展と目的貫遂に努力せんと誓ふ。

二、四月二十一日午後二時金澤市高岸寺に於て支部第二回北陸總會を開催す、出席人員十五名。

#### 1. 當日大會の順序

一、開會の辭 二、讀經 三、顧問挨拶 四、他縣會員挨拶 五、協議事項 六、茶話會 七、記念撮影 八、散會

#### 2. 當日出席者人名

石川縣 坂井元淳師、中屋教海、中屋教諦、櫻井宏仙、谷川寬徳、前田惠仁、越野教宣、中山元蓮  
富山縣 福島瑞岳、間宮觀應、松村文光、櫻榮鍊靜、大澤鍊勇、葛原榮靜

福井縣 森田文暢

三、四月十日 關西に於ける校友會大會に松村幹事出席二十

一日夕刻歸來し其の大會の協議事項及び經過報告をなす。  
四、祖山學院の紛擾を傳聞するも何等の連絡なし、總會席上眞相究明に努力すると共に之に對する態度に就きて協議す、同時に會員一名を登詣せしめて連絡することゝす。

四月二十一日

五、右連絡員關西に至り解決方法あるを察知し、その機運にあるを看取して歸來す、依て幹事數名金澤市蓮覺寺に集合して協議す。

六、四月二十一日午後六時金澤市淺の川河畔並吉樓上に於て會員中の歸還兵櫻榮君、中山滿行の葛原君の兩者に祝意を表すと共に會員相互の懇親を計り一夕の宴を催す。

七、本支部の創立發展に甚大なる努力を盡されたる松村文光師は目下、宗務所役員及び富山市青年團等の要職に在り活躍中なり。

八、石川縣富山縣間の連絡、事務進行上前田君大ひに活躍す、會員相互間の融和は此の種、縁の下の力持ち師に負ふ所大なり。

### 京都校友會支部會報

國家は今あらゆる方面に向つて一大變革が遂げられようとしてゐる、そこには多大の忍苦と犠牲が要請せられてゐる、個人的利害の如きは當然放擲排撃されねばならない。時局を認識して新しき事態に即應し善處し得ざるものは悉く自滅の道を辿る

の外はない。宜しく聖祖門下一丸となつて立正安國の大義のもとに滅私奉公の誠を致すべきである。

光は身延よりと宗祖立教の本旨と異体同心の祖訓を攄し僧徒本來の使命を達成せんがため昨年五月結成されたのが本支部である。

會する毎に、そこには常に不思議に融けあつた感激がある。それは凡らく靈山身延に學び本地の風光に育まれたものゝみの味はう感懐であらう。この感激こそ眞に宗門飛躍の原動力でありこの感激を教化に寺門經營に強き力として活動こそ祖師への御奉公であり宗門人としての道であらう。

昨秋十一月十五日三木幹事の斡旋盡力により本山立本寺に於て成立第一回講演大會を開催、全會員奉仕、就中三木、美馬、田中師等熱誠あふるゝ大獅子吼は聽衆に多大の應銘を與へ身延ならではの感を愈々深からしめた事と思ふ。

更に特筆すべき事は本年四月全國祖山出身者懇親大會を催した事である。宗門悉知の如く四月十一日より四日間に亘り大本山妙顯寺に於て皇紀二千六百年奉賛祝禱並像尊六百遺忌法要の嚴修せらるゝに當り或は宗門代表として又末寺として多數出身者の上京あるべく本會はこの千載一遇ともいふべき好期を意義あらしめ相互協力の實を擧ぐべく、時恰も遠忌局詰として登山せる兵庫の吉川啓善師並に門末管理、評議員たる大阪の有光友逸師等と謀り本會並に近府縣在住有志發起の下に十三日午後六時より料亭龜彌に於て開催集るもの遠く四國より岡觀修師身延

の結城瑞光師、富山の松村文光師、越前の戸田周妙師等實に四十一名、誠に未曾有の盛會と言ふべきであらう。記念撮影をなし吉川啓善師の一入熱調を帯びたる開會の挨拶あり、續いて各師交々立つて自己紹介或は抱負を語り意見の開陳あり、宴酌となるや各所に圓座となつて互に過ぎにし日の思ひ出多き學窓生活語り合ふ状態はまこと筆舌につくし難きものがあつた。かくて和氣霽々裡に午後十時辻能學師の閉會の辭を以て終了この催しの得る所極めて大にして且つ大いに祖山の意氣を高からしめたる事を衷心より喜ぶと共に將來の結束を切望して止まない特に中條、泉兩先生の御臨席下された事は我等の深く光榮とする處心計りの紀念品をお送り申上げ感謝の印とした。

尙大先輩鎌田麗嶽、伊藤海聞兩僧正は宗門要職にある方とて御多用のため御來臨を得なかつたのは誠に残念であつたが特に殊更な御配慮に預つた事は深く感激に堪へない所である。

出席者（○印は發起人）

- 中條是明 泉 義 敬 結 城 瑞 光  
 戸田周妙 岡 觀 修 松 村 文 光  
 ○淺野耀章 ○守法頂淳 二宮龍巖  
 ○辻能學 ○花島良瑞 ○重松學壽  
 ○吉川啓善 ○吉田英享 天津泰秀  
 大橋潮育 近藤憲正 ○鈴木常耀  
 ○田所英照 ○有光友逸 ○貫名英俊  
 ○美馬鳳準 大野學正 ○余田慈石

厚德寮々報

- 秋田智淳 ○三木淨達 ○矢谷惠暢  
 福澤觀教 中條良暹 小林行海  
 ○福山英學 原 智 晃 山田友篤  
 永瀧堯順 上木龍明 山田良信  
 牛居一教 今江即淳 北川即正  
 横枕智昭 加藤龍靜 各師

因に本會々長として常に懇切なる御指導を下される淺野耀章師は京都修法師會々長として重きをなし顯山評議員其の他の要職にあられた花島良瑞、三木淨達師は光山學院に教鞭をとり更に常任布教師として活躍せられつゝあるは本會のため欣ばしい事である。  
 （貫名記）

## 厚德寮々報

舍内は舍監の下に良く統制ある生活をしてゐる。今年度の役員は舍長岩成光運、副舍長前田超光、同藤澤玄唱（多賀）の諸君は舍生一同と協力して學業、行法の増進に一意専心舍の向上發展を謀つてゐる、會計は野口耀源君、會計助手に江口啓淳君物資不足節約の折柄舍生に不自由の感無き様よく切り廻してゐるのには一同喜んでゐるが、九月八日一身上の都合にて江口君退舍辭任し、その後を佐藤孝君が引継ぎをした。舍は南北各寮